

いそがしい夏

二年 本間 英人（平成三年度）

夏。この季節には、島でも、また、どここの家でも観光客でにぎわいをみせる。この季節になると、夏休みなどもあり、毎日、家の手伝いをしなければならない。ぼくは、この家の手伝いをするのが好きではない。なぜかという、家の手伝いといっても並大抵の仕事ではないからだ。例えば、朝早くから起こされて、お客さんのふとんをあげることは始まり、朝食の準備の手伝い、それが終わるとお膳を運び、お客さんが帰った後の掃除などもやらなければならない。そんなことが夜まで続く。夜になったらなつたで、ふとんをしき、食器もならべなければならない。

夏のある日、その日は朝から眠くて、たまらない日だった。ぼくは起きたが、眠くて、仕事をするのが遅かった。すると母が、「眠てなは、みんな眠てな。」と母がぼくに言った。そのときぼくは、返す言葉がなかった。考えてみれば母や父、祖母、祖父は、ぼくが起きる前から、まだ夜もあけないうちから働いているのだ。そう思うと、ぼくも手伝って協力しなければならないという気持ちになり、ぼくをやる気にさせた。ぼくは、顔を洗って、すつきりさせた。ぼくは、顔を洗

っただけで、なんだか、心が晴れ晴れとしたような感じをうけた。

「何、手伝えばい？」ぼくは自分自身が変わったような口調で聞いた。「もう少して、お膳出すがら、お客さんのふとんあげできて。」ぼくは、父と二人で、お客さんのふとんをあげに走る。手わけをして、ふとんをたたみ、お膳を出せる準備をする。ぼくは、ふとんのあがつたところから順序よく、お膳を運ぶ。このときも、ぼくは、父や母などに協力しなければならぬというようないきなり、一生懸命に手伝った。やつと一段落着いたので朝食も食べた。おなかもすいていたし、なによりも、働いた後のご飯は、とつてもおいしかった。ご飯を食べているとき、「手伝でもらだから早くできた。ありがどの。」と母から言われた。ぼくは、一生懸命やつてよかったという気持ちでいっぱいだった。

「ありがど」めつたに聞かないその言葉に、「いよ、まだ手伝うがら」口ずさむと、そのとき、父と母の顔が、うれしそうに笑っていた。ぼくは、これからも家族で協力して、少しでも、父母たちに楽をさせられるようにしていこうと心の中でつぶやいた。

飛島には、今年もたくさん観光客が来た。ぼくは、あのいそがしい夏の父と母の笑顔を忘れない。